

69

室町時代から明治時代初期までの 我が国における骨軟部腫瘍外科について

大幸 俊三, 早川 智

日本大学医学部病理学系微生物学分野

【目的】 室町時代末期（戦国時代）から明治時代初期における西洋外科学による骨軟部腫瘍外科について検討する。

【方法】 日本大学医学部資料室並びに国立国会図書館の一次文献を系統的に検索した。

【結果】 西洋外科学は16世紀の戦国時代にポルトガルから伝来し、AlmeidaやFerreiraは膿んだ傷に油を入れ焼灼する方法や木綿糸による創の縫合を伝えた。17世紀になり阿蘭陀医学が主流となり、Casparは1649年来日し、紅毛医術を日本人医師と西洋人外科医が初めて情報を伝え合い、向井元升は「紅毛外科秘要」（1654）で腫物・腫瘍に関して西洋と東洋の関連づけを試みられた。さらに16世紀に書かれた仏蘭西のPareの外科学書（1582）が100年以上経って植林鎮山が重訳した「紅夷外科宗伝」（1706）で血管の結紮が伝わり、その中で腫瘍は単純腫物と複合腫物に分類されている。18世紀になり吉雄耕牛の口授で腫瘍は良性瘤、鼻茸、悪性瘤（岩）、血瘤、気瘤、瘻瘤があり、良性と悪性を分け、外科器械に「骨瘤テ難治之時ウウ（テレハーン）」の記載があり、切除されていたものと思われる。杉田玄白や大槻玄沢はHeisterの外科学書（1724）を重訳し、「瘍医新書」（1790）を作成し、乳癌の記載がみられる。19世紀になり大和見立より指導を受けた華岡青洲は全身麻酔での乳癌の切除に成功したが、消毒は焼酎を用いている。彼の手術記録で骨瘤の切除や下腿骨々肉腫の他に粉瘤、脂瘤、肉瘤（脂肪腫、線維腫、肉腫）の切除した報告がある。華岡の弟子の本間玄調は「瘍科秘録」（1859）に記載した瘻瘤を気瘤、筋瘤、骨瘤、血瘤、肉瘤、粉瘤、脂瘤、胎瘤、髪瘤、蟲瘤に分け、骨瘤の記載では「顴骨ニ多ク發シ、療治セリ。四肢ハ關節ニ發スルモノナリ、骨何トナク漸々ニ隆起シテ瘤ト成ナリ、硬キコト石ノ如ク。皮ヲ割開シテ骨ヲ碎キ去ルニ黄水ノ出ルモノナリ、サレハ骨中ニ敗液ヲ停蓋シ、多クナルニ從テ骨ノ隆起スルモノナルヘシ。療治シテ低クハナレドモ瘀水滴瀝シテ止ス附骨疽ニナルモノ多シ。」と記載している。この続編では血瘤：「動靜ニ證共ニ治シ難キノミナラス久シキ時ハ、必自潰シテ死スル者多シ」、肉瘤：「多クハ翻花スルモノニテ年久シキ寸ハ自潰シテ死スルモノナリ、大ナルハ截断ス」、脂瘤：「其液粘稠ニシテ膠鉛ノ如ク、瘤膜ヲ除キ去ルニ速ニ愈ユ」、神経瘤：「其瘤硬クシテ白ク透明ニシテ珠玉ニ似タリ、此瘤恐クハ神経ノ凝滯シテ發シタル者ナルヘシ」、水脈瘤：「水脈有リ出タル水ハ清稀ニシテ少シモ臭氣ナシ。此レ留滯シテ瘤ト成ルヘシ」、粉瘤：「瘤膜ヲ鑷子ニテ引き、瘤ヲ取タル跡ハ焼酎等ニテ洗フニ棉布ニテ拭ヒ去リ縫合スル」とある。佐藤尚中がStromeyerの著書を訳した「外科医法」（1865）では腫瘍は刺激（刺衝、刺戟）に応じて生ずるとされ、「産物ハ顕微鏡ニテ観、髓瘤ハ其織ナセル質ハ甚ダ異ナリ」とある。細胞は「数房」、がん細胞を「小顆」と訳され、全身麻酔はクロロホルムによる麻酔が記載され、鎮痛、病理解剖、止血（結紮）の三要項が略整った。その後、石黒忠恵が発行した「外科説約」（1874）では細菌は「有機性小細胞」とされ、Listerの消毒（1867）の記載があり、解剖、止血、鎮痛、制腐の近代外科学の四要項が完成された。その中で骨軟部腫瘍は病的贅生物があり、表皮瘤、結組織瘤、纖維瘤、脂肪瘤、軟骨瘤、骨瘤、血管瘤、筋肉瘤、嚢瘤などがあり、骨瘤や軟骨瘤は悪性についても外科療法が記載されている。

【結語】 室町時代から明治時代初期にかけて、300年の西洋外科学を顧み、1798年に吉雄耕牛口授の記録で骨瘤切除される器械がみられ、華岡青洲以来19世紀の外科学は目覚ましい進歩で、石黒忠恵が発行した「外科説約」で解剖、止血、鎮痛に制腐が加わった。骨軟部腫瘍手術の図説はGrossの外科学（1866）を基にしたものが多く、X線発見前であるが、骨軟部腫瘍外科は大きな進歩を迎った。